

土木学会中部支部 中部地方巨大災害タスクフォース

歴史・教訓に減災を学ぶ見学会 (地震・津波編)

実施報告

平成25年6月29日(土)

□歴史・教訓に減災を学ぶ見学会 開催主旨：

中部支部管内で発生が危惧される巨大台風、巨大地震・津波及び大規模土砂災害等の巨大自然災害に関して、一般市民や学生等が過去に発生した歴史的巨大自然災害の爪痕調査や災害の被災地における防災の取り組みの調査の参加、今に伝わる先人たちの減災の知恵を理解したうえで、巨大自然災害に対する備えについて中部支部タスクフォースのメンバーとも一緒に討議を行うことで、巨大自然災害の備えに関する活動を推進する。

開催回数：年3回を想定

(1回目：6月29日(土)※今回、2回目：9月11日(水)、3回目：12月頃)

開催地(案)：

◇地震・津波編

・静岡県湖西市・浜松市(1854年 安政地震による津波)

◇大規模土砂災害編

・富山県中新川郡立山(1858年飛越地震による鳶山崩れ)

◇台風・高潮編

・三重県長島方面から岐阜県海津市方面(1959年伊勢湾台風)

中部地方の歴史的地震・津波

○ 明応地震

明応7年(1498)8月25日午前8時頃

日本で起きた最大級の地震、浜名湖が切れて、海とつながった

- ・静岡県御前崎の南方約50kmを震源
- ・マグニチュードは8.4で、日本で起きた最大級の地震
- ・房総から紀伊の太平洋沿岸で大津波
- ・流死者は4万1千人

○ 宝永地震・富士山宝永噴火

宝永4年(1707)10月4日 午後2時頃と4時頃

東海・東南海・南海の3連動地震、その49日後に富士山噴火

- ・静岡県の遠州灘沖を震源
- ・その1~2時間後に紀伊・四国沖を震源とするM8.6の3連動
- ・伊豆半島から九州の太平洋沿岸で大津波
- ・この地震の49日後に富士山噴火

○ 安政地震

安政1年(1854)11月4日 午前9時頃

東海地方で起きた巨大地震、2日後には南海地震も発生

- ・静岡県掛川市横須賀の南方約50kmを震源
- ・M8.4
- ・東海・東南海・南海の連動地震
- ・静岡県下田・遠州灘、三重県の伊勢志摩から和歌山県の熊野灘沿岸で甚大な被害

○ 東南海地震

昭和19年(1944)12月7日 13時36分

- ・三重県尾鷲市沖約20kmを震源
- ・M7.9
- ・熊野灘沿岸で大津波

土木学会中部支部 中部地方巨大災害タスクフォース

歴史・教訓に減災を学ぶ見学会

(地震・津波編)

開催日:平成25年6月29日(土)8:30~18:20

見学場所:静岡県湖西市・浜松市

参加者:土木学会員及び学生、教員、NPO等 計 32名(事務局含む)

内容:【現地視察】

○白須賀宿[しらすかしゆく] (湖西市)

○新居関所跡[あらいせきしょあと] (")

○岐佐神社[きさじんじゃ] (浜松市)

【フォーラム】 テーマ:この地の歴史に学ぶもの

1)中部地方巨大災害TFの概要とフォーラムの進め方

中部地方巨大災害TF座長 辻本哲郎氏

2)講話

○天災と伝説・信仰・地名について 竹内礼子氏

○地震・津波と宿場の移転について 塩見寛氏

3)討論会:歴史・教訓を踏まえた巨大災害への備えについて

主催:土木学会中部支部 中部地方巨大災害タスクフォース

協力:(一社)中部地域づくり建設協会

□歴史・教訓に減災を学ぶ見学会(地震・津波編) 行程

- | | |
|---|--|
| <p>8:30 名古屋駅 出発(太閤通)
車中DVD放映「迫り来る南海トラフ巨大地震に備えて」</p> <p>10:10 豊橋駅 出発(豊橋信用金庫前)
車中DVD放映「迫り来る南海トラフ巨大地震に備えて」</p> <p>10:40 湖西市 白須賀宿歴史拠点施設「おんやど白須賀」到着
白須賀宿 現地見学(70分)</p> <p>11:50 湖西市 【国指定特別史跡】新居関所 到着
新居関所 施設見学(20分)</p> <p>12:50 浜松市 食事・休憩所 到着 うなぎ割烹「康川」</p> <p>13:40 浜松市 岐佐神社 到着
岐佐神社 現地見学(30分)</p> | <p>14:50 浜松市 討論会場 到着
TKP浜松アクトタワーカンファレンスセンター25F カンファレンスB</p> <p>15:00 フォーラム開会
1) 中部地方巨大災害TFの概要とフォーラムの進め方
中部地方巨大災害TF座長 辻本哲郎氏</p> <p>2) 講話
○天災と伝説・信仰・地名について 竹内礼子氏
○地震・津波と宿場の移転について 塩見寛氏</p> <p>3) 討論会「歴史・教訓を踏まえた巨大災害への備えについて」</p> <p>16:10 フォーラム閉会・解散</p> <p>18:40 名古屋駅 到着・解散</p> |
|---|--|



土木学会中部支部 中部地方巨大災害タスクフォース

歴史・教訓に減災を学ぶ見学会
(地震・津波編)

現地見学

しらすかしゆく

白須賀宿

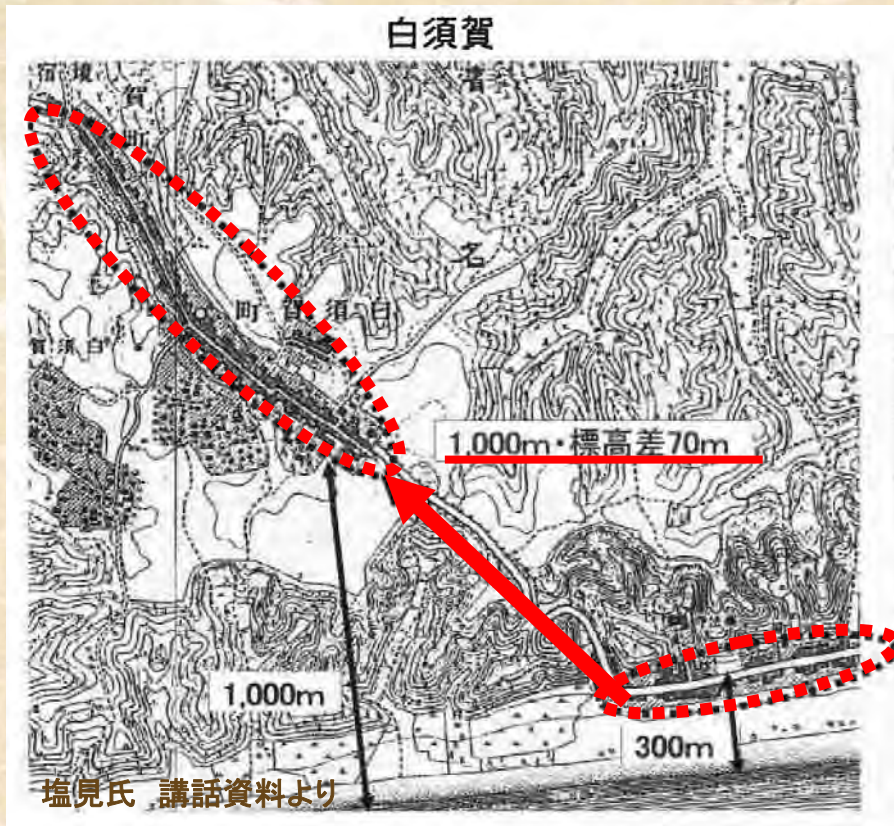
□白須賀宿

白須賀宿は、遠江国の西端の宿場町。東海道五十三次の32番目の宿。元来、白須賀宿は、潮見坂下の現在の元宿にあったが、宝永4年(1707年)の地震・津波により、大半の家が流されてしまったため、翌年坂上に所替えをした。

天保14年(1843年)の東海道宿村大概帳によれば、白須賀宿は、江戸日本橋から70里22町(約275キロメートル)の距離で、町並みの長さは東西で14町19間(約1.5キロメートル)、宿内の人数及び家数は、加宿境宿村を含めて2,704人、613軒であった。本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠屋が27軒あり、宿場としては中くらいの規模。現在でも、格子戸のある古い民家や、間口の狭い家並みなど、江戸時代の面影を残している。



◇海拔5～6mから約70mの高台への所替え



街道沿いにある建物の海拔表示



塩見氏による現地案内

元来の白須賀宿は海拔5～6m程度
程度の場所であったが、宝永7年
(1,707年)の津波被害後、海拔
70m程度ある現在の場所に所替
えを行った。



所替えした地では津波の心配は無くなったが、冬季に西風が強くと
たびたび大火災にみまわれたため、常緑樹で火に強い槇を植えて
火事の延焼を食い止めた。

□おんやど白須賀宿

「おんやど白須賀」は、白須賀宿の歴史文化に関する知識を広めるとともに、散策する人々の交流休憩ホールとして、新たな文化、交流の発信拠点として活用されている。

展示概要

1. 宝永四年に宿を襲った津波の記録
2. 白須賀宿の文化人
3. 和紙人形による汐見坂風景の再現
4. 白須賀宿昔語り
5. 企画展示 他



◇白須賀宿の歴史と文化に関する知識を広める



ジオラマやパネルを使って地震・津波の歴史などを紹介している

津波跡をなまなましく残している
“はぎ取り土層”



「おんやど白須賀」で管理人 森氏からの説明

□気づいたこと・学んだこと

- 白須賀宿は宝永4年の被災後に高台に生活拠点を移していた。その後、津波による大きな被害はなくなっていた。従って、津波に対する有効な手段として、高台で生活する事が考えられる。
- 現代では集落の移転というものが時々あるが、それが江戸時代から行われていたことが驚きだった。
- 8ヶ月で高台に宿場を移転したその早さに驚かされた。
- 移転した実績があるにもかかわらず、依然として危険地帯と思われるところに、新築住宅が多く建っていることに不安を感じた。
- 日頃普通に通過していた地域が過去に実は大被害を受けていたことを認識した。

土木学会中部支部 中部地方巨大災害タスクフォース

歴史・教訓に減災を学ぶ見学会
(地震・津波編)

現地見学

あらいせきしょ

新居関所

□新居関所跡

新居関所は、江戸時代には今切関所といわれ、慶長5年(1600年)に設置された。

創設当初は、浜名湖の今切口に近い位置にあったが、元禄12年(1699年)・宝永4年(1707年)と度重なる災害により、わずか7年の間に西北へと2度移転を繰り返した。

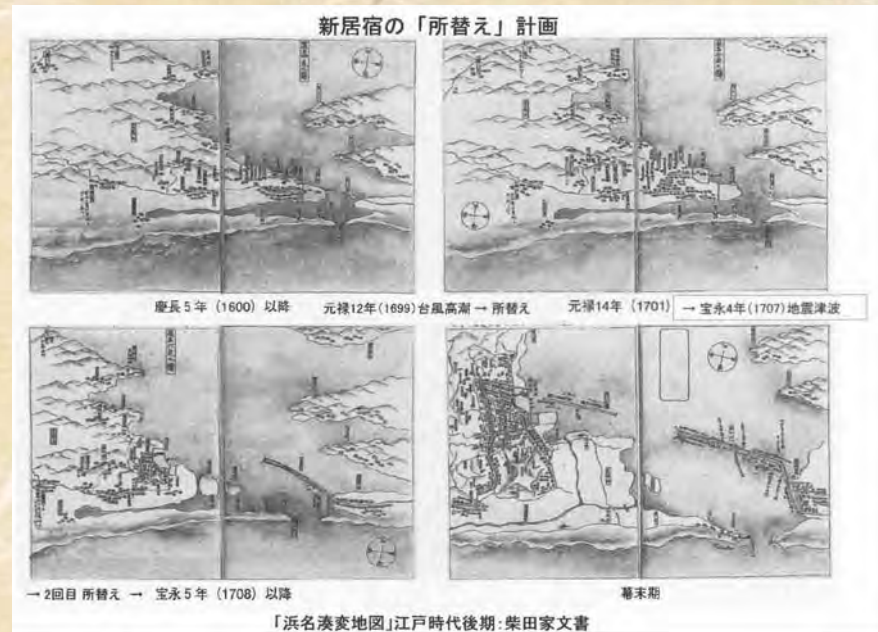
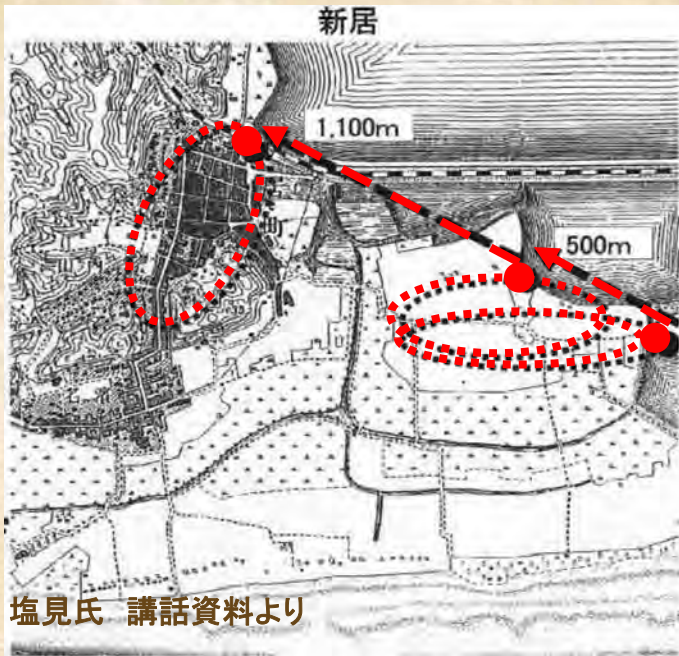
関所は、常に浜名湖岸に建ち、構内には東海道の新居・舞阪間を結ぶ今切渡しの波船場があり、浜名湖を往来する旅人の監視と「入り鉄砲と出女」を取り締まりました。

現存している関所建物は安政2年(1855年)から5年にかけて建て替えられたもの。

昭和30年(1955年)、国の特別史跡に指定され、同46年には解体修理を行い、今では全国で唯一現存する関所建物として大切に保存し、公開している。



◇度重なる災害により2度移転を繰り返した関所



「新居関所跡」で案内人 寺田氏からの説明

□気づいたこと・学んだこと

- 我々は、地震・津波への対応を考えるにつけてまだまだ歴史に学ぶところがある。
- 歴史への好奇心をより防災に生かせる仕組み作りが肝要。官民の組織の構成員の知恵がフルに活用され、かつ、住民全体に意識が広がるようにする観点からも「歴史」は一つのキーワードとなるように思う。
- 過去の津波・地震のたびに町は移転を繰り返しながら災害の教訓を残してきたことを大切にしていけることが必要と感じた。
- 3回目の新居関所の所替えのときの家の配置が不規則になっているように見えたが、家の配置と津波の影響について何か意図があったのか。

土木学会中部支部 中部地方巨大災害タスクフォース

歴史・教訓に減災を学ぶ見学会
(地震・津波編)

現地見学

きさじんじゃ

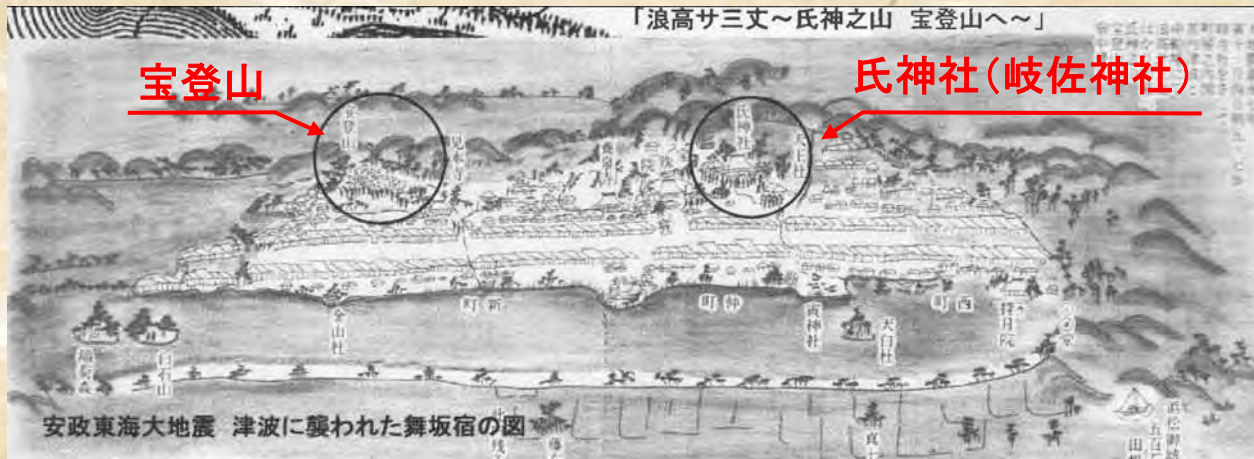
岐佐神社

□岐佐神社

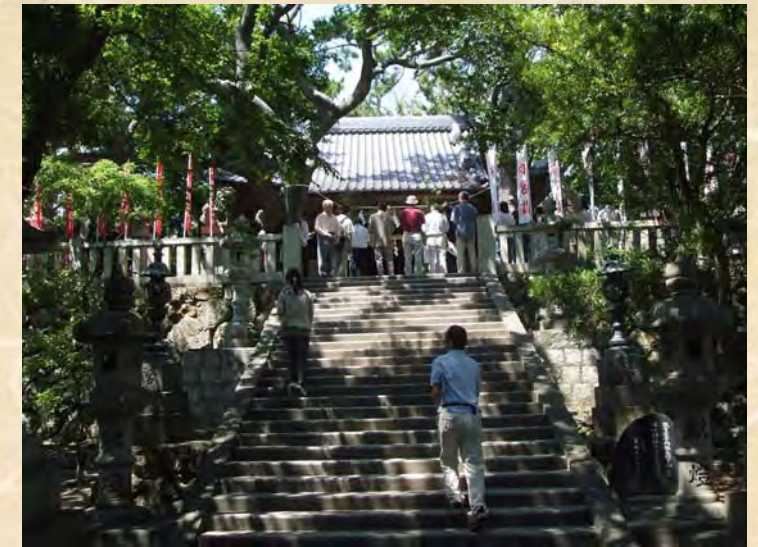
岐佐神社が現在の地にまつられるようになったのは1498年(明応7)年に起きた明応地震以後。地震の津波によって舞澤(現:舞阪)を含む多くの土地が水没し、大きな被害を受けた。その津波によって流れ着いた岐佐大明神の小神祠を住民たちが見つけ、社殿を建立してまつったのが現在の鎮座地である。神社付近の松原には地震の難を逃れた住民たちが集落を作っており、それが現在の舞阪町のもととなっている。



◇今も地域住民の津波避難場所として



安政東海地震で津波に襲われた舞坂宿の図
高台となっていた氏神社(岐佐神社)と宝登山に避難する人々が描かれている。
※宝登山は現在なくなっている。



標高6m程の高台にある岐佐神社
現在も津波避難場所として利用されている。



「岐佐神社」で宮司 高柳氏及び総代 鈴木氏からの説明

□気づいたこと・学んだこと

- わざわざ津波避難所を作らなくても、小高いところの神社を避難場所に位置づければ良い。
- お参りやお祭りを通して避難訓練を実施すればコミュニティの形成にもつながる。
- 宝登山などは、津波避難場所が開発されたかもしれないが、神社であれば誰も開発せず残したのではないか。
- 岐佐神社には、付近の住民が自信の際に避難したとの故事もあり等の歴史があり、現在も「ひなん所」として看板を掲げるにふさわしい施設となっている。
- 歴史的な経緯を尊重しつつ、最新の技術を駆使してより有効な対策・施設とすべき。
- 歴史的な記憶は宗教と結びついている場合も多い。

土木学会中部支部 中部地方巨大災害タスクフォース

歴史・教訓に減災を学ぶ見学会

(地震・津波編)

フォーラム

～この地の歴史に学ぶもの～

日 時:平成25年6月29日(土) 午後2時30分～午後4時00分

会 場:TKP浜松アクトタワーカンファレンスセンター25F カンファレンスB

議事次第:1)中部地方巨大災害TFの概要とフォーラムの進め方

中部地方巨大災害TF座長 辻本哲郎氏

2)講話

○天災と伝説・信仰・地名について

竹内礼子氏

○地震・津波と宿場の移転について

塩見 寛氏

3)討論会 「歴史・教訓を踏まえた巨大災害への備えについて」

4)閉会

◇講師プロフィール

○竹内 礼子(タケウチ レイコ)氏 駿府静岡歴史楽会事務局代表

1974年奈良女子大学住居学科卒業、都市計画コンサルタント会社に就職。1990年～2006年静岡県内の自然歴史文化を紹介する季刊誌「静岡の文化」編集制作。
1998年～2005年 NPO「しずおか流域ネットワーク」設立、50人の小中学生と共に水辺で遊ぶ活動を続ける。
2006年～現在、編集出版業と市民対象の歴史探訪会を企画実行している。

○塩見 寛(シオミ カン)氏 静岡県建築士会 景観整備機構 副代表

1952(昭和27)年 京都府綾部市生まれ。九州芸術工科大学環境設計学科卒業、筑波大学大学院環境科学研究科修了後、1979年4月から静岡県庁、2011年3月退職。
現在、Kei まちづくりネットワーク代表。博士(工学)、(公社)静岡県建築士会景観整備機構副代表
(公社)日本建築士会連合会 heritage 保全活用支援TF 委員、火の見櫓からまちづくりを考える会代表、しずおか町並みゼミ世話人、著書に『まちの個性を、どう読み解くか—東海道筋まち並み町づくり—』静岡新聞社2001年8月、共著に『地域発・三十奏の響き』日本建築士会連合会編・公職研2005年6月、編著に『火の見櫓—地域を見つめる安全遺産—』鹿島出版会2010年7月など。

1) 中部地方巨大災害TFの概要とフォーラムの進め方

中部地方巨大災害TF座長 辻本哲郎氏

- ・巨大災害を経験して、あらゆるサイズの災害に減災、克災できる仕組みを考えたい。
- ・市民、行政、学識者が協力して動く必要がある。
- ・災害をイメージし、時間軸や関係者を考えながらシナリオをまとめている。
- ・今回は活動を通じて市民への情報提供及び地域の歴史、教訓から減災に関する知恵を学ぶための取り組み。



辻本座長によるフォーラムの説明

2) 講話

○天災と伝説・信仰・地名について

竹内礼子氏

- ・各地に残されている地名は地形を物語っているものがある。
梅 → 埋まる、島 → 縄張り、蛇 → 土石流の跡、猿 → 山崩れ 等
- ・近年従来の地名を変えてしまう事もあり、読み解く必要もある。
光が丘、桜ヶ丘などは注意
- ・神社、仏閣などには災害と関係の深いものが多い



竹内氏による講話

○地震・津波と宿場の移転について

塩見 寛氏

- ・昔の人は移転(所替え)を短期間に行っている。
(白須賀宿:8ヶ月、新居宿:6ヶ月)
- ・支配者(幕府)、管理者(問屋場)、住民が一致団結して行った。
- ・住み続けようとする意図を持って計画しているため、それを読み解く事が重要。
- ・災害を受けた宿場には物語、歴史が(教訓等)がある。



塩見氏による講話

3) 討論会 「歴史・教訓を踏まえた巨大災害への備えについて」

□議論・発言内容

- 所替え(高台移転)以外に検討されたことはありませんか。
 - 舞阪は宿場町の周りに宿圀(石垣)を作っている。何らかの方策を行っていると思われるが文章が残っていない。
 - 被害を受けたから移転するのではなく、これまで被害を受けてどうしてきたか、どのような計画で移転するのかプロセスが重要である。
- 情報が溢れている現代で、歴史や教訓などの情報が十分に活かされていないと思うが。
 - 歴史から学べないところもある。
- 神社やお寺などの行事等を利用して防災意識の向上につなげていた。現代も利用することができないか。
 - 茅野輪くぐりなど無病息災などは受け継がれているため、災害に利用することは可能と考える
 - 神社の場所は津波被害を受けない場所にあることが多い。神社の立地場所から学ぶことも可能かと思われる。
- まちづくりは人の意識づくりと考えると「防災まちづくり」はネガティブな感じがして長続きしないのでは。
 - 災害が怖いことだと知る機会が少なくなっている。どのような災害があるか知ること大事と考える
 - まちづくりは防災だけではなく、生活を総合して考えていく必要があると考える
- 歴史を学ぶことで、所替えなどの対策を知るとともに、所替えができなかった場所の対策(建物の配置等)をどうしたのかなどの考え方を調べると、他の地域の対策のヒントになると思う。



討論会の様子



参加者からの発言





最年少の参加者
からの発言

・防災についての勉強をするとき、教科書にある写真などでしか現地の姿を見たことはありませんでした。過去の災害から学び、教訓を得ることで持続可能な社会を作っていくことは私たちが担っている大きな使命であること、そして実際に現地を目で見ることによって、私の暮らしは昔の人の知恵によって築き上げられたものだということを改めて実感する機会となりました。そして、災害に打ち勝つということは、昔の人が築き上げたものを元の形のまま守り続けることだと知りました。

それに対し、過去の災害から学び、安全な町が作られたはずなのに、現在は脆弱な土地に住宅地があるという現状も目の当たりにし、過去の教えがとても忘れ去られやすいものだと知ることもできました。私自身、今回の経験を通して学び得たものを、身近な所から伝えていけたらいいと思いました。

□ 今回の歴史・教訓に減災を学ぶ見学会で学んだこと

- 昔の人の知恵によって築き上げられたものを実感することが大事。
- 現代は災害が怖いことだと知る機会が少なくなっている。どのような災害があるか知ることが大事。
- 過去の教えは忘れ去られやすいものであり、伝えていくことが重要である。
- 高台移転等の対策は、その場所がこれまで被害を受けてどうしてきたか、どのような計画で対策を講じるのかプロセスが重要である。

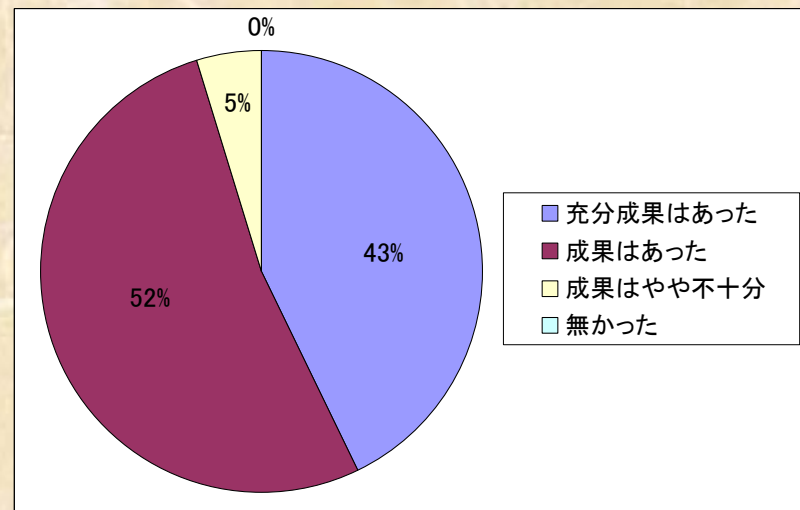
□アンケート結果

○アンケート回答者:21名

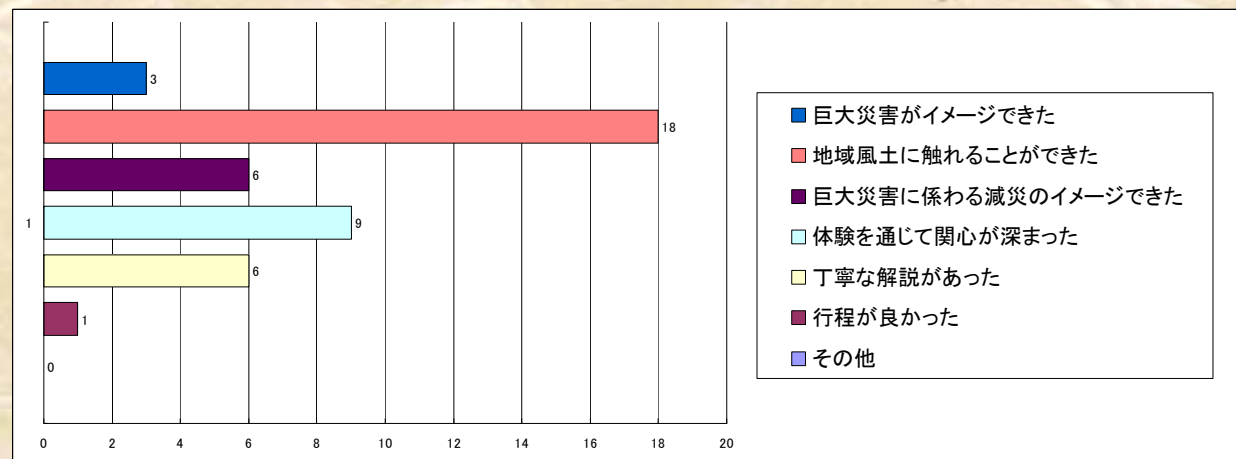
○年齢 20代:4名 30代:1名 40代:5名 50代:7名 60代:4名

○性別 男性:19名 女性:2名

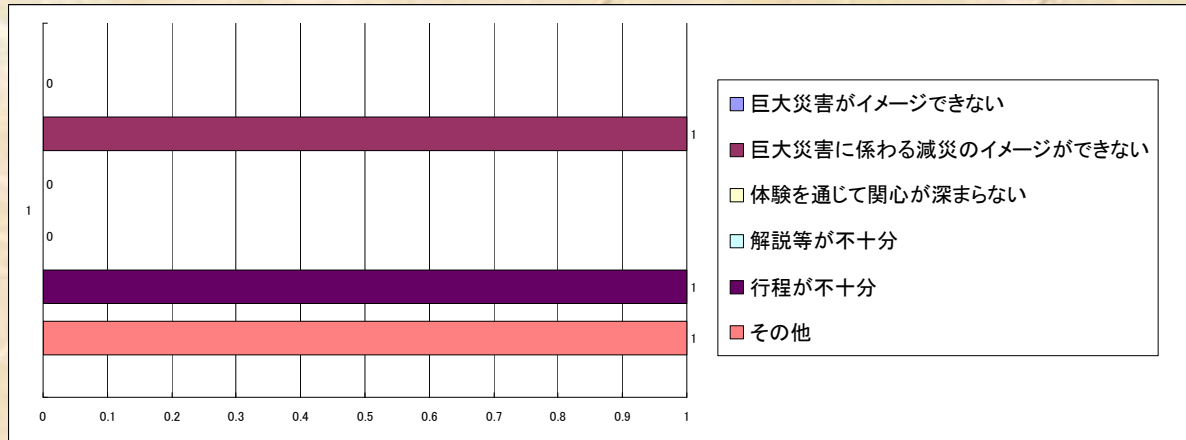
Q1:今回は、「歴史・教訓に減災を学ぶ」をテーマに見学会を開催しましたが、その成果は如何でしたか。



Q2:十分成果があった・成果があったとお答えいただいた方にご質問です。その理由を次項から選んで下さい。



Q3: 成果が無かった・やや不十分とお答えいただいた方にご質問です。その理由を次項から選んで下さい。



その他の意見：
もう少し時間が欲しかった。

Q4: 今回の見学会で歴史から学ぶ減災方策についてイメージできたものがあれば教えて下さい。

- 先人の努力が活かされているとはいえない。所替えしなければならなかったところに新しい住宅がたくさん建っている。
- 移転などをする間の人々の生活がどうなっていたのか気になりました。新しい土地に移るまでどう暮らしていたのか。
- 所替えが参考になった。しかし、災害を風化させないことも重要と思われる。
- 災害は忘れた頃にやってくる。→白須賀地域の移転、その後の元地域への街並み形成。
- 高台への移転、まちづくり、歴史的施設の活用、歴史の大切さ
- 「楽しい」や「興味」と「減災」がうまく結びつくことの重要性を再認識できた。
- 減災方策だけでなく歴史から学ぶことがたくさんありました。
二度と地域に津波等の災害が起きないような教訓は多くありましたが、活かされていない面は残念です。
- 集団移転の考え方、安全と生活のバランスの持ち方。
- 昔の建物の配置や習慣などから対策が考えられるのではないか。
- 土木の力でハードは昔より高まったが、一方コミュニティーの力、自助・支助力は落ちてしまったような気がする。
そこをどうするか。環境学習と絡めたNPO活動、ESDが良いと思う。(持続可能な開発のための教育)
- 一人一人が助かりたい、そして大切な人を守りたいという思いが一番大切なことだと知りました。
- 減災という言葉を知りました。白須賀では、津波の後、町を高台に移したということ、岐佐神社付近では一番高い尾根に街道を造ったということ、それ以外にあまり分かりませんでした。
- 神様はどんなことがあっても流されたり、壊れたりしてはいけないものであり、そのような点からは安全な場所に建てなければならない。昔の人はそれを絶対的に信じて生きてきたのだろう。

Q5:その他、今後の参考にご意見がありましたらお聞かせ下さい。

- 見学場所をもっとしぼって(2箇所程度)丁寧に見学した方が良いように感じた。
- 減災を考えるうえで一つのきっかけになりました。ありがとうございました。"
- 訪問先で見学すべき内容トピックスをコンパクトにまとめて資料を入れて欲しい
- 現地での説明が良かった。地域の歴史に詳しい方が説明していただくと、大変理解が深まる。
- 会議室での会話、議論より、現地を見て共通の立場で話し合うのもよいと思った。
- フォーラムの内容やその目的を、前もって知らせてもらえたらある程度の準備もできた。
スタッフの方が、出席者の方々の写真を撮ってみえたが撮りすぎのように思えます。"
- 今回は移転が大きなテーマのひとつであったけれど、高低差が明示されているともっとよかった。
現在の防災マップ等と過去の災害・被害エリアの比較ができるともっと良い。"
- 有名なピカソのゲルニカはスペイン空爆のことを描いているが、写實的に描いたら悲惨さから皆いずれ「忘れたい」「見たくない」となってしまう。そこで抽象画にして子ども達が「いったい何だろう、これ？」と気づかせることを目的としたらいい。長続きする防災の伝え方を考えてみたい。
- 今後このような会があるのであれば、学生にももう少し声をかけていただくとありがたいです。
貴重な経験をさせていただきありがとうございました。
- 現地を見て考える機会ということで、土木学会の企画にはよく参加していますが今回は大変よい経験であったと思います。
当地の今後を考えるうえでよい計画をされたことを感謝します。
市民で技術者の立場から今後も参加させていただきたいのですが、休日を中心に企画していただくとありがたいと思っています。



岐佐神社にて